



先進地紹介

住民・行政・事業者の協働による景観を大切にしまちづくり ～長野県小布施町～

常総市都市建設部都市整備課 主事 山中 理絵

茨城県都市計画協会が主催する平成26年度先進地視察で、長野県の小布施町を訪れました。ここでは、行政と関係住民・事業者の協働による「町並修景事業」を中心としたまちづくりの取り組みについてご紹介します。

■小布施町の概要

小布施町は長野県北部の長野盆地に位置する町で、長野市からは北東に約15kmの距離にあります。上信越自動車道の小布施パーキングエリアにはハイウェイオアシスがあり、平成18年にはETC専用のスマートインターチェンジも本格運用され、利便性が向上しました。

町の産業はリンゴやブドウといった果樹主体の農業です。関連産業として、特産の栗を使った栗菓子は全国的にも有名で観光の目玉となっています。



面積	19.07km ²
人口	11,326人
世帯数	3,705世帯
※小布施町HPより H26.10.1現在	

■歴史とまちづくりのはじまり

町の歴史は古く、約1万年前の旧石器時代からとされています。江戸時代後期には、千曲川における舟運の発達により、長野県三大市の一つに数えられる安市に面影を残す定期的な六斎市がたち、北信濃の経済・文化の中心として栄えました。幕末には、葛飾北斎や小林一茶をはじめ多くの文人墨客が訪れ、今に続く文化の薫り高い雰囲気 が形づくられました。

しかし、明治期に入ってから訪れ者が減り、町の勢いは衰え、さらに、昭和期には高度経済成長による若者の流出により人口が1万人を割りました。このことを受け、町は開発公社を設立し、宅地造成を行うこととなりました。その余剰金を利用し昭和51年に、葛飾北斎の作品を保存展示する「北斎館」を建設。これをきっかけに北斎の町として脚光を浴び始めました。



北斎館 高井鴻山の招きにより晩年小布施を訪れた葛飾北斎の作品が町には多く存在。それら作品が保存展示されています。

■町並修景事業の実施

北斎館の建設をきっかけに、本格的なまちづくりが始まりました。この時期、北斎館の近くに高井鴻山の旧宅を改装し、「高井鴻山記念館」の開館を予定していたこともあり、これらを結んだ面的整備を進めるべく、昭和57～61年にかけて町並修景事業が実施されました。

町並修景事業は、栗菓子の老舗や大壁造りの民家など、歴史的な景観をとどめている町の中心部地域を、まちづくり基本構想により歴史文化ゾーンに設定し、より快適で個性豊かなまちづくりを進めるために、関係住民と行政及び事業者の協働により行った事業です。



「修景」とは、もとの美しさを損なわないように風景を整備することですが、小布施町の修景事業では、古い町並みを単に保存するのではなく、もとの景観要素を残し、また新しい建築物については、それらとの調和を目指すことにより、新たな景観をつくり出しました。

受益の優先順位を居住者におき、住民・行政・事業者が対等な立場で整備を行ったこの方法は、画一的な都市再開発の手法と異なり、「小布施方式」とまで言われ、全国的にも高い評価を受けています。

その後は、これからのまちづくりの指針として、周囲の景観との調和と美しい町並みづくりのための「環境デザイン協力基準」の策定、ゾーン整備を全町的に広げた「ホープ計画（地域住宅計画）」の策定、美しいまちづくりの実現に寄与した者に対する助成・表彰制度を盛り込んだ「うるおいのある美しいまちづくり条例」の制定など、法制化を進めるにつれ、住民を含んだ町全体の「景観を大切にしたいまちづくり」の意識が高まってきました。

■修景事業地の風景

【高井鴻山記念館】

高井鴻山没後100年を記念し、鴻山の旧宅復元を町で計画。歴史文化ゾーンの中核となっています。



【栗の小径】

栗の木の角材を敷き詰めた遊歩道。北斎館と高井鴻山記念館を結ぶ散策道となっています。



■花によるおもてなしのまちづくり

町は他にも、景観によるまちづくりの取り組みのひとつとして、「花によるまちづくり」を行っています。主な取り組みとして、住民が自宅の庭を開放するオープンガーデンがあります。花を媒体にした新しい交流を目指し、平成12年から実施。現在は130軒余が参加しています。また、ボランティアの方による沿道花壇の整備も全町的に行われています。



オープンガーデンに参加している庭には、案内板が置かれています

■新たなまちづくり

北斎館を中心とした町並修景事業とは趣を異にした町の新たな拠点の創出を図るため、平成21年より、修景事業地北部の中町エリアにて、住民や企業等が協力し、第2町並修景事業を行っています。多くの来訪者が中町地区の資源を堪能し、住んでみたいと感じる「商業」と「生活」が調和した空間づくりを進めています。



また、将来を見据えたまちづくりの施策を研究するべく、東京理科大学が町役場内に研究所を開設。まちづくりの第2ステージに向けた活動を始めています。

■おわりに

小布施町は人口約1万人の小さな町ですが、町並修景事業をはじめとするまちづくりの結果、今では年間100万人を超える方々が訪れるそうです。視察の際も、平日にも関わらず多くの観光客で賑わっていました。しかし、小布施町は以前から観光地であったわけではありません。今の観光客で溢れる町の姿があるのも、北斎館の建設というひとつのきっかけから、あくまでも住民が快適に生活できる住環境の整備を目的に、住民との協働によるまちづくりを進めた結果だと思えます。視察では、住民の方の景観への高い意識を強く感じるとともに、オープンガーデンの取り組み等からまちづくりを楽しみながら行う姿が印象的でした。

小布施町のような住民主体のまちづくりを進めるためには、行政はバックアップの立場として、住民が活発な意見を発信できる場の提供と、その意見を反映させた基本的なルールづくりを進めていくことが必要だと感じました。